

不滅の法燈

比叡山延暦寺の根本中道には、天台宗を開いた最澄の時代に始まり、以来1200年余の長きにわたり、消えることなく守り伝えられている「不滅の法燈」といわれている灯火があります。

この「不滅の法燈」は、山形県の「宝珠山・立石寺」に分灯されており、リスク分散の例として紹介されることもあります。実際、比叡山も立石寺も、戦国時代に法燈が一回ずつ消えたことがあるそうですが、分灯していたことが幸いして、今日まで、途切れることなく法燈は守り続けられています。

法燈というのは、釈迦の教えを世の闇を照らすのを灯火にたとえていわれている言葉です。そして、仏教界では、宗門、宗派に伝わる教え（法燈）を師から門弟へと伝えることを伝燈といっています。

「不滅の法燈」は、仏の教え、真理、更には志といったものを1200年余にわたって伝え続けてきた象徴であり、伝燈が伝統の語源であるということも頷けます。

伝燈は仏教の世界で使用される言葉ですが、伝統は、国、会社や学校などの組織、更には家庭の中で、習慣や様式、技術、更には風俗やしきたりなどとして、古くから受け継がれてきたものをいいます。そして何よりも重要なことは、「不滅の法燈」が今なお光を放ち続けているように、伝統として伝えられてきたものが、今もなお厳然と息づいているということだと思います。

我が国の戦後教育においては、伝統を受け継ぎ守り育てていくということが、蔑ろにされて来たのではないのでしょうか。

昭和22年に制定された教育基本法の前文では「普遍的にして個性豊かな文化の創造」といういい方はしていますが、伝統という言葉は何処にも出てきません。平成18年の法改正によって、やっと「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す」教育を推進する（教育基本法前文）ことが謳われました。

私には、伝統文化を切り捨てた不毛の大地に新しい文化の目が育つとは、到底思えません。その意味では、当たり前前の方が明文化されたといっって良いでしょう。

勿論、伝統を受け継ぐといっっても、単に形だけを守ることだけなら、映像化して博物館にでも収蔵しておけば良いということになるでしょう。大切なことは、伝統の中に染み込んでいる先人達の思いを受け継ぎ、それを自分の中で発酵させて、今に活かしていくことだと思ひます。

延暦寺根本中道の法燈が、1200年間新しい油を注ぎ足してきたことによつて「不滅の法燈」となつたように、伝統もまた、常に新しい油を注ぎ足していく努力が不可欠です。

私は、教師の皆さんもまた、油の注ぎ手になつて、伝統という光を絶やさないで欲しいと願つているのです。(塾頭 吉田 洋一)